

<史料紹介>

山口県文書館所蔵アーカイブズガイドー学校教育編（5）ー

山本明史・和田秀作・金谷匡人

山口県文書館では、所蔵資料を学校教育現場での活用という観点から捉えなおし、授業で活用しやすい形で学校教育現場へ提供する取り組みを平成22年度から行っている。その成果は、『山口県文書館研究紀要』第38号～41号に掲載し、また当館WebサイトにもPDFの形式でアップロードしている。本稿はその続編である。

昨年度、Webサイトでの利活用の促進を図るためにPDF版の再編集作業を行った。具体的には、画像にポップアップ機能を付けて資料の拡大表示を可能とし、またレイアウトについてもディスプレイモニタ上での閲覧に適したスタイルに改めた。

▶Webサイトアドレス <http://ymonjo.ysn21.jp/index/page/id/524>

当館は、この資料集が文書館と学校教育現場をつなぐ架け橋となることを願っている。授業実践に関し、学校教育現場と情報の共有を図りたいと考えているので、資料の活用方法等について質問があれば、ぜひ当館に問い合わせさせていただきたい。

- ▶ 項目立ては東京書籍の中学校新課程教科書「新しい社会 歴史」に準拠した。本稿のトピックの番号は、前稿からの通番とした。
- ▶ 原稿執筆にあたっては、No.125, 126, 128, 129, 138, 142 を和田, No.127, 132, 133, 135 を金谷, No.130, 131, 134, 136, 137, 139～141, 143, 144 を山本が担当した。

* 平成26年度山口県高等学校教育研究会社会部会山口地区協議会において、学校教育現場の先生方に当館のアーカイブズガイドの取り組みを紹介するとともに、意見交換を行った。



章	節	項	38～41号	42号	
1 古代までの日本	1-1 文明のおこりと日本の成り立ち	1-1-1 世界の古代文明と宗教のおこり		125	
		1-1-2 日本列島の誕生と縄文文化			
		1-1-3 弥生文化と邪馬台国			
		1-1-4 大王の時代	1/76		
	1-2 古代国家の歩みと東アジア世界	1-2-1 聖徳太子の政治改革			
		1-2-2 大化の改新			
		1-2-3 律令国家の成立と平城京			
		1-2-4 奈良時代の人々の暮らし			
		1-2-5 天平文化			
		1-2-6 平安京と東アジアの変化			
1-2-7 摂関政治と文化の国風化		77			
2 中世の日本	2-1 武士の台頭と鎌倉幕府	2-1-1 武士の成長		126	
		2-1-2 武家政権の成立	2/78		
		2-1-3 武士と民衆の生活	46	127	
		2-1-4 鎌倉時代の文化と宗教	79		
	2-2 東アジア世界とのかかわりと社会の変動	2-2-1 モンゴルの襲来と日本	3		
		2-2-2 南北朝の動乱と室町幕府	4/80		
		2-2-3 東アジアとの交流	5		
		2-2-4 産業の発達と民衆の生活		128	
		2-2-5 応仁の乱と戦国大名	6/47/103		
		2-2-6 室町文化とその広がり	81		
3 近世の日本	3-1 ヨーロッパ人との出会いと全国統一	3-1-1 キリスト教世界とルネサンス			
		3-1-2 ヨーロッパと外の世界			
		3-1-3 ヨーロッパ人との出会い	7		
		3-1-4 織田信長・豊臣秀吉による統一事業	8	129	
		3-1-5 兵農分離と朝鮮侵略	9		
		3-1-6 桃山文化	10		
	3-2 江戸幕府の成立と鎖国	3-2-1 江戸幕府の成立と支配のしくみ	11/48		
		3-2-2 ささまざまな身分と暮らし	12/49/82		
		3-2-3 貿易の振興から鎖国へ	13/50		
		3-2-4 鎖国下の対外関係	14/51	130	
	3-3 産業の発達と幕府政治の動き	3-3-1 農業や諸産業の発達	15/52/83	131	
		3-3-2 都市の繁栄と元禄文化	16/17/84		
		3-3-3 享保の改革と社会の変化	18		
		3-3-4 田沼の政治と寛政の改革	19～21/85		
		3-3-5 新しい学問と化政文化	22/23/53/86～89	132～134	
		3-3-6 外国船の出現と天保の改革	24/90/91		
	4-1 欧米の進出と日本の開国	4-1-1 近代革命の時代			
		4-1-2 産業革命と欧米諸国			
4-1-3 ヨーロッパのアジア侵略		25			
4-1-4 開国と不平等条約		26/27			
4-1-5 江戸幕府の滅亡		28/29/54/92	135		

章	節	項	38～41号	42号	
4 開国と近代日本の歩み	4-2 明治維新	4-2-1 新政府の成立	30/55/93/94		
		4-2-2 明治維新の三大改革	31/32/56/104		
		4-2-3 世界とつながる日本と文明開化	57/105/106	136	
		4-2-4 岩倉使節団と殖産興業	33/34/58/107	137	
		4-2-5 近代的な国際関係	108/109		
		4-2-6 自由民権運動の高まり	35/59/110		
		4-2-7 立憲国家の成立	60/111～114	138	
	4-3 日清・日露戦争と近代産業	4-3-1 欧米列強の侵略と条約改正	95/115		
		4-3-2 日清戦争	61/62/96/116		
		4-3-3 日露戦争	63/64		
		4-3-4 韓国と中国	65/97		
		4-3-5 産業革命の進展	36		
		4-3-6 近代文化の形成	37/38/117	139～141	
5 二度の世界大戦と日本	5-1 第一次世界大戦と日本	5-1-1 第一次世界大戦	66/118		
		5-1-2 ロシア革命		142	
		5-1-3 国際協調の高まり			
		5-1-4 アジアの民族運動	98		
		5-1-5 大正デモクラシーと政党内閣の成立	67/99		
		5-1-6 広がる社会運動と普通選挙の実現	68		
		5-1-7 新しい文化と生活	69/100/119	143	
	5-2 世界恐慌と日本の中国侵略	5-2-1 世界恐慌とブロック経済			
		5-2-2 欧米の情勢と日本	101		
		5-2-3 日本の中国侵略	39/70/120		
		5-2-4 日中全面戦争	40/102		
	5-3 第二次世界大戦と日本	5-3-1 第二次世界大戦の始まり			
		5-3-2 太平洋戦争の開始	41/42		
		5-3-3 戦時下の人々	43/71/121/122		
		5-3-4 戦争の終結	44/72		
	6 現代の日本と世界	6-1 戦後日本の発展と国際社会	6-1-1 占領下の日本	45	
			6-1-2 民主化と日本国憲法	73/74	
6-1-3 冷戦の開始と植民地の解放			123		
6-1-4 独立の回復と55年体制					
6-1-5 緊張緩和と日本外交					
6-1-6 日本の高度経済成長			75/124	144	
6-2 新たな時代の日本と世界		6-2-1 冷戦後の国際社会			
		6-2-2 変化の中の日本			
		6-2-3 よりよい未来に向けて			

No.125 エジプト文明



* 和田敏英収集史料 526 (45の5)「TUT-ANKH-AMEN (ツタンカーメン)」のうち、「ツタンカーメンの黄金のマスク」写真部分

【解説】

「エジプトはナイルの賜物」という言葉があるように、エジプトに古代文明が発達した大きな要因の一つに、ナイル川との

関わりがあげられます。

すなわち、ナイル川が毎年夏に氾濫して出来上がった肥沃な土地を耕して農業が盛んになり、富が蓄積された結果、この地には小さな国がたくさん生まれました。これらの国々は紀元前 3000 年頃には、強大な権力をもった国王（ファラオ）のもとに統一されます。彼らは神のように敬われ、その権力の象徴としてピラミッドという巨大な墓が築かれるようになりました。一方、ナイル川が氾濫する時期を知るために天文学が発達し、太陽の動きを基準にした太陽暦が作られます。そして、記録するための手段としての象形文字（ヒエログリフ）も発明されました。

写真上は、古代エジプト第 18 王朝（紀元前 14 世紀）のファラオであったツタンカーメンのミイラにかぶせられていた黄金のマスクです。科学的な調査の結果、彼は身長 165cm（古代エジプトの成人男性の平均とほぼ同じ）で、体格はかなり華奢であり、19 歳という若さで亡くなったと推定されています。死因は、大腿骨の骨折に起因する感染症とマラリアとの合併症による体調不良の悪化という説が有力です。

* 写真右は、ギザのピラミッドとそれを守るスフィンクス（王の顔とライオンの体をもつ神聖な存在）です（和田敏英収集史料 526 (45の16) ⑤「〔絵葉書〕（ギザのピラミッドとスフィンクス）」）。



No.126 姓と名字

* 興隆寺文書20巻4 「大内義隆二月会頭役
差定」の署判部分「多々良朝臣義隆(花押)」



* 毛利家文庫 23 譜録さ30「佐々木七兵衛佐良」
冒頭の割書は、「姓は源。近江国佐々木に住
す。よつて氏となす。中比(なかごろ)長州
伊佐村に住し、在名を以て氏となす。のちま
た佐々木と称す」
(二)では、名字は氏と表現されています)

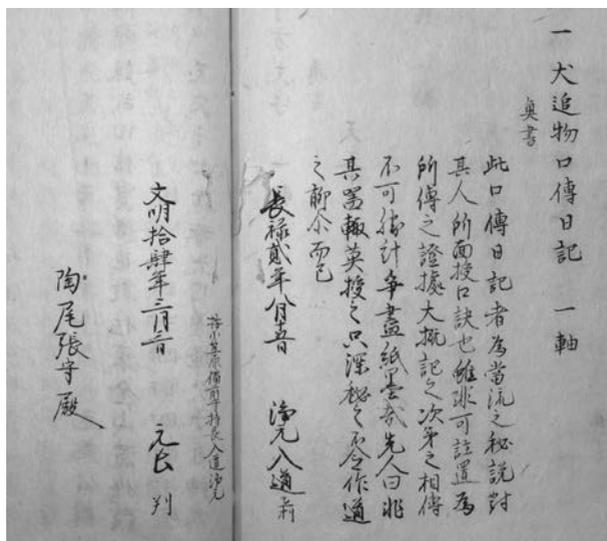
【解説】

姓と名字は、現代では同じ意味ですが、本来はまったく別物です。姓は一族のルーツを示す公式な名であり、名字は私的に名乗るものです。前者は、源・平・藤原・橘などが著名であり、後者は本拠地や役職の名などに由来するものがあります。10世紀ごろに登場した武士が成長し、各地で勢力をもってくると、日常の場では、姓に代わって本拠とした土地の名を名字として名乗る例が増えてきます。武士が政権を担った鎌倉時代になると、こういったことが一般的になりました。

例えば、鎌倉幕府の実権を握った北条氏は、桓武天皇を祖とする一族(桓武平氏)なので、姓は平、名字は本拠地である伊豆国田方郡北条(現静岡県伊豆の国市)に因んでいます。幕府の有力御家人の中には、足利、小山、畠山、三浦など、関東地方の地名に由来する名字をもつ者も少なくありません。

中世の山口県域の代表的な武士である大内氏の場合、姓は多々良で、周防国吉敷郡大内(現山口市)を本拠としたことから、大内を名字とします。そこから分かれた一族は、各々の本拠地の名を名字として、右田、問田、鷲頭、末武、陶などと名乗りました。このほか、伊佐(源姓・美祢市)、青景(藤原姓・美祢市)、厚東(物部姓・宇部市)、相森(三善姓・岩国市)、武久(藤原姓・下関市)、仁保(平姓・山口市)など、山口県の地名を名字とした武士は、勢力の大きさを問わず、数多くいます。

No.127 犬追物（いぬおうもの）



【解説】

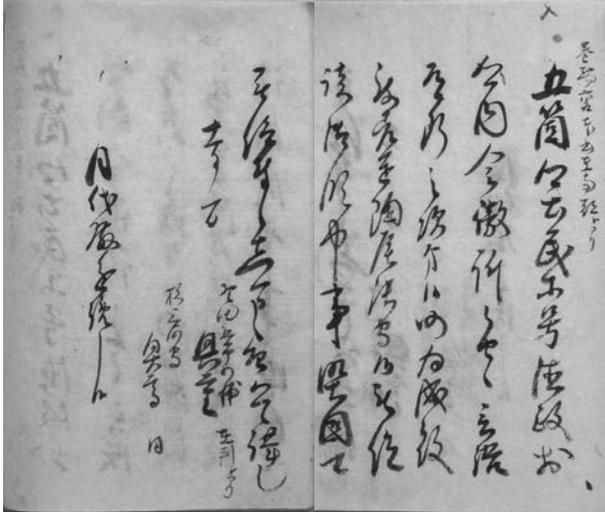
鎌倉時代の武士は、日頃から武芸の訓練に励みました。この訓練として笠懸・流鏑馬とともに行われたのが、走る犬を馬上から射る犬追物です（騎射三物）。馬上の弓術は武芸の中でも最高位のものとなされ、なかでも犬追物は広い土地や多くの人馬に加えて数多くの犬の準備が必要だったため、有力な武士のあいだで行われました。

室町時代になると犬追物はしだいに定型化し、また小笠原流などの流派の「口伝」（くでん。秘伝を師が弟子に直接伝授すること）が行われました。写真は、小笠原流犬追物の「秘説」が1482（文明14）年に陶尾張守（弘護）に対して伝授され、その大概を記した記録が与えられたことを示すもので、その記録の原本は防府市の毛利博物館に現存します。陶氏の本拠地であった富田保（現周南市）には「犬の馬場」という地名もあり、陶氏と犬追物の関係がしのべれます。

大内氏もさかんに犬追物を行いました。16世紀の大内義隆の時代になると、しだいに娯楽色の強い競技となっていたようです。

* 「犬の馬場」地名は当館の徳山毛利家文庫 打渡帳 30「防州都濃郡富田保打渡坪付 五」（1622（元和8）年）や同 57「寛永御打渡牒」（1626（寛永3）年）に見えますが、その後は見えなくなります。防長の犬追物は毛利氏の時代になって廃絶しました。

No.128 村の自治



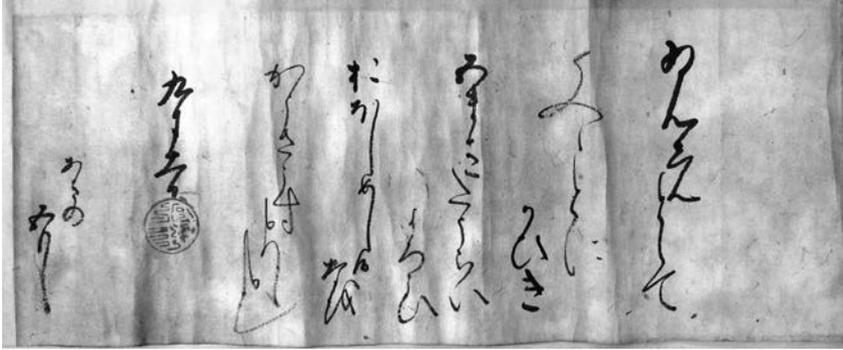
*旧藩別置記録 風土注進案191 「古文書之三十三」のうち「大内氏家臣連署奉書写」。本文は、「五箇郷土民等、徳政と号し、郷内において傲訴（ごうそ）せしむの由に候。言語道断の次第に候。よつて、成敗のため陶尾張守を差し遣わされ候。仰せ談せられ、御領中の事、堅固に仰せつけらるべきの由申すべきの旨に候。恐々謹言」

【解説】

室町時代になると、生活・生業の基盤としての村には、有力な農民を中心に、小百姓も含んだ自治組織（惣）が作られました。惣は、寺庵や社を信仰の拠り所として祭祀を行い、山林や農業用水施設の維持管理などについての村の掟を定め、団結を強めました。そうした力を背景にして、荘園領主や武家領主層らによる年貢などの過重な負担に対抗するために、訴訟や財産をあらかじめ他所に隠しての計画的な逃散を行い、さらには一揆などの実力行使にも及ぶようになります。これらは、複数の村が結びついて行われることも少なくなく、領主層にとってはやっかいな出来事でした。

写真は、16世紀前半に、周防国衙領の「五箇郷」の住民が徳政を要求して一揆をおこしたことを示す資料です。領主である東大寺に独力でこの一揆を抑える力はなく、守護である大内氏が、「言語道断之次第」（大変けしからん事態）と認識して、筆頭家臣で周防守護代でもあった陶氏を派遣して鎮圧させています。実は、この一揆がおこる数年前に、大内氏は分国内における徳政を禁止する法令を出しています。この頃の山口県域でも、自治組織をもった村が発達し、広域に連合して領主の支配に対抗することがしばしばあったことがわかります。

No.129 豊臣秀吉



* 右田毛利家文書貴 14 (7) 「豊臣秀吉朱印状」。本文は「あんしん（音信）として、文こと（殊）にかひき（海気）五まき（巻）たうらい（到来）。よろこひ（喜び）おほしめし（思し召し）候。なを（猶）かうさうす（孝蔵主）申すべく候。かしく」

【解説】

全国統一を目前にしながら倒れた織田信長の後継者が、豊臣秀吉（1537～98）です。1585（天正13）年四国の長宗我部氏を降した秀吉は朝廷から関白に任じられ、「豊臣」姓を名乗りました。そして、天皇から日本全国の支配権を委ねられたと称し、惣無事（全国の平和）を呼びかけて全国統一事業を進めました。1587（天正15）年に九州の島津氏を、ついで1590（天正18）年関東の後北条氏と奥羽を平定して、ついに全国を統一しました。こうして、低い身分に生まれながら、「天下人」にまで上り詰めた秀吉は、成功物語の主人公として語り継がれ、今なお大阪を中心に「太閤さん」として人気があります。

写真は、秀吉が手紙や海気（絹織物）が届いたことを喜ばしく思う旨を伝えた礼状です。宛名の「あきの五もし」とは、「安芸国にいる娘」という意味で、かつて秀吉の養子の妻であった女性（毛利輝元の従姉妹）と考えられています。天下人の秀吉から親しく呼びかけられて、彼女もうれしかったのではないのでしょうか。秀吉が多くの人々に支持された理由の一つとして、人情家で、人を魅了する性格であったことがあげられます。この資料もそういった彼の性格の一端を表すものでしょう。

* 当館には、豊臣秀吉の出した文書として、宍戸家文書巻1（11）、三浦家文書甲5（108）、右田毛利家文書貴7（13）、同8（16）、同14（4）～（6）、村上家文書272・273などがあります。

No.130 出島



* 小野家文書 134 「肥州長崎図」

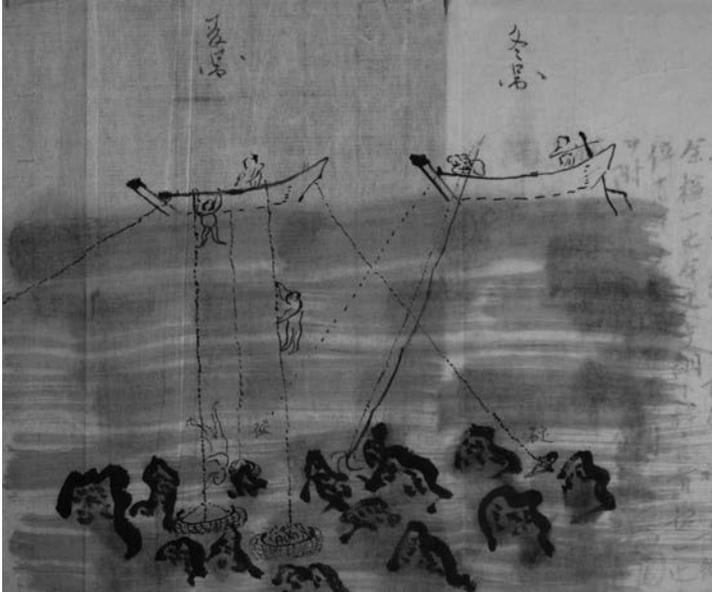
【解説】

1635（寛永12）年、江戸幕府はキリスト教の禁止を徹底するため日本人の海外渡航および海外に住む日本人の帰国をいっさい禁止しました。そして翌年、長崎の町人に命じて扇形に埋め立てた「出島」を作らせ、そこにポルトガル人を住まわせました。その後1639（寛永16）年にポルトガル人を追放し、1641（寛永18）年、平戸にあったオランダ東インド会社日本商館を出島に移しました。以後、出島は鎖国体制下の日本で唯一のヨーロッパ世界との接点となりました。

上の図では、長崎の町と橋で結ばれた出島の様子や、荷揚げのための波戸、出島内部の建物、旗竿などが描かれています。出島の左下方には唐人屋敷が見え、長崎町内には各藩の大名屋敷が描かれています。湾内には引き船にひかれたオランダ船や中国船の姿も見えます。

* 当館にはこのほか、出島を描いた絵図として「長崎図」（毛利家文庫 58 絵図 448）、「長崎図」（毛利家文庫 58 絵図 449）、「長崎出島絵図」（藤津家文書 347）などがあります。

No.131 藩政時代の漁業（「水産慣例原稿」）



* 県庁戦前A農業 509「水産慣例原稿」

【解説】

1879（明治12）年、明治政府は従来の漁業の実態を把握するために、漁法、漁具、貝類・藻類の採法、漁場等についての報告を各県に求めました。山口県では各郡からの報告を1882（明治15）年にとりまとめ、それを基に政府への報告書を作成しました。これら各郡からの報告の原本を1冊に綴じたものが「水産慣例原稿」です。

とりわけ漁法についての記述が詳細で、網の入れ方から漁の季節まで、図入りで説明がなされています。図に精粗はありますが、江戸時代から明治時代初期の漁業の姿を伝えています。

写真は、大島郡西三浦村（現周防大島町）における瀬戸貝（イガイ）漁に関する記述の部分です。漁場、漁の季節、漁獲高などの記述とともに、「夏は水練」「冬は熊手」で瀬戸貝を採る様子が描かれています。

* 明治時代初期の漁業調査としては、このほか「旧藩漁業制度取調書」（県庁戦前A農業505・506）、「漁網取調書 長門ノ部」（同507）、「網代取調書」（同508）、「魚市場慣行調」（同510）などがあります。

No.132 大相撲の興行



* 御蘭生翁甫文庫 224「防長史料 3」にある龍門由五郎の手形。御蘭生翁甫が大正年間に周防大島で現地調査した際に写しとったものです（下は筆者の手）。

【解説】

相撲は古代以来の長い歴史をもっています。江戸時代の相撲興行は京・大阪・江戸の勧進相撲（社寺の造営等の費用を捻出するための興行）として始まり、やがて定期的に行われ、番付

のしくみも整いました。江戸では深川の富岡八幡宮、ついで両国の回向院で本場所が行われました。

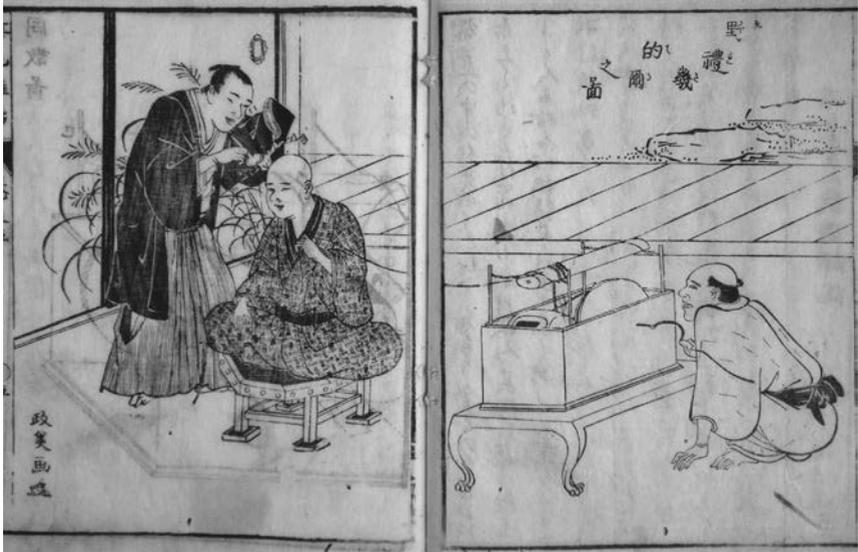
写真は、富岡八幡宮の「巨人力士身長碑」に歴代4位の長身（7尺4寸5分＝約226cm）として刻まれている、周防大島出身の「龍門由五郎（好五郎・芳五郎）」の実寸手形です。彼は1828（文政11）年にはいわゆる「看板力士」（実際に相撲は取らず、その巨体で観衆の耳目を集める力士）でしたが、地元には数々の巨漢・怪力伝承が残っています。

相撲は庶民に大人気で、大名たちは競って有名力士を抱えました。現在も残る大相撲の「阿武松（おうのみつ）部屋」は、相撲を好んだ毛利氏が抱えた横綱阿武松緑之助を初代とする部屋で、「阿武松」は長州の萩にちなむしこ名です。1828年秋の回向院での番付表では、長州藩は阿武松のほか、関脇岩戸山、前頭1枚目越ヶ浜を抱えていました。

* 由五郎の手形は、このほか内田家文書（防府市）2384・2794にもあります。

* 当館の龍門由五郎の関連資料としては、手形のほかに御蘭生翁甫文庫 263「防長史料 42」（防長の巨人の列伝）、旧藩別置記録 大島宰判本控2などがあります。

No.133 蘭学の発達（「紅毛雑話」）



*エレキテルの図（佐藤家文書と漢 208-1～5「紅毛雑話」）

【解説】

「紅毛雑話」の著者である森島中良は、「解体新書」の訳出にも参加した幕府の奥医師桂川甫周の実弟で、自らも医師・蘭学者・戯作者などとして幅広く活動しました。

「紅毛雑話」は兄の甫周がオランダ人に面会して得た新知識などを中良が一般向けにわかりやすく紹介したもので、1787（天明7）年に刊行されました。オランダの歴史・風俗、諸外国の地理的事情、西欧から日本への海路および通過する国々の事情や流行病やオランダの画法に関する記述などがあり、なかでも顕微鏡で見た生き物たちの図や、ライオン・ワニの絵は有名です。中良は戯作者としての平賀源内の弟子でもありました。

写真は巻五に載せるエレキテルの図で、その内部構造を示した図もあります。エレキテルはオランダで見世物や医療器具として発明され、日本へは18世紀半ばに持ち込まれました。平賀源内は長崎滞在中に破損したエレキテルを入手し、1776（安永5）年に江戸深川で模造製作に成功しました。

No.134 オランダ語学習



* 佐藤家文書和漢 133 「訳鍵 凡例・附録」

【解説】

写真は「訳鍵（やくけん）凡例・附録」です。「訳鍵」は稲村三伯の著した蘭和辞典「ハルマ和解」の中から、弟子の藤林普山が2万7千語を選び改良したものです。1810（文化7）年に「乾」・「坤」2巻と「凡例・附録」の全3巻として刊行され、便利な蘭和辞典として多くの蘭学者に用いられました。

この内「凡例・附録」は簡単なオランダ語の入門書で、アルファベットの発音や書き方に始まり、数字、季節、月、曜日など基礎的な用語、さらに簡単な文法、読解例などが書かれています。また医学関係の文章を用いた例文では漢文の返り点を使って訳が示されています。そのほか、オランダ語を解説する際の心得なども書かれています。後にこの「凡例・附録」は「蘭学逕（けい）」として独立しました。

* 写真右は蘭和辞典「ドーフ・ハルマ」の大村益次郎自筆とされる筆写本です（大村益次郎文書76）。「ドーフ・ハルマ」は長崎でオランダ商館長ドーフと通詞らによって編集された辞典で、稲村三伯の「ハルマ和解」が「江戸ハルマ」と称されたのに対して「長崎ハルマ」と呼ばれました。大村は兵書の翻訳に積極的に取り組み、1864（元治元）年にオランダの戦術書を翻訳するなどしています。

* 藤林普山の「蘭学逕」は神本正律文書375（8の1）に残されています。



No.135 幕末の風説書



* 毛利家文庫 29 風説 5
「諸所風説書」

【解説】

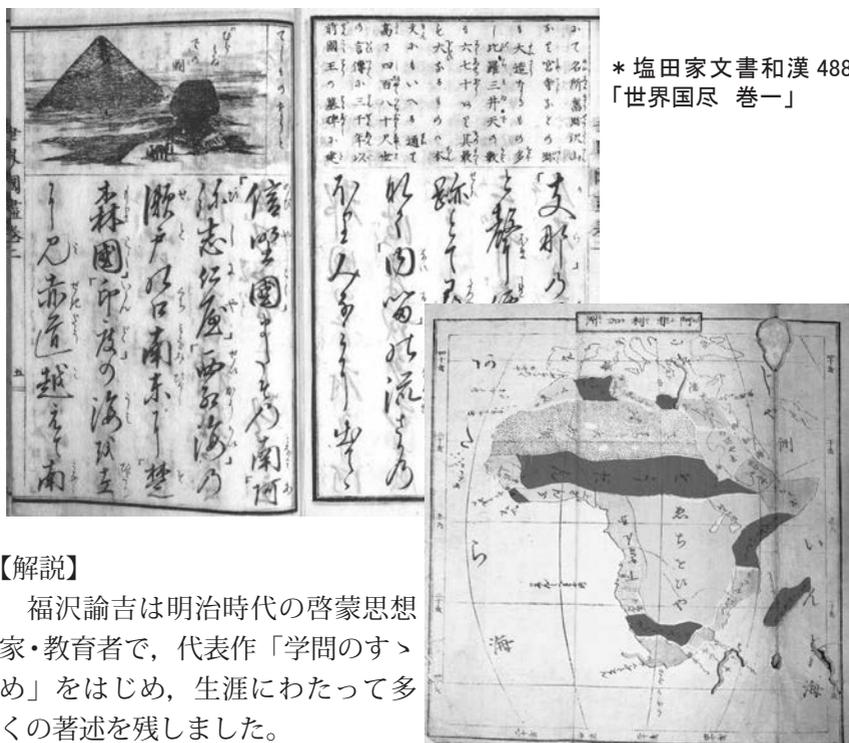
幕末期には情報に対する人々の欲求が高まり、「聞書」「風説書」などと呼ばれる時事情報をまとめた記録が多く見られるようになります。瓦版などの印刷物は規制・制約も多く、当時の時事情報は落書（らくしょ）・張り紙・筆写本などの手書きの媒体を介して広まりました。そこからは、人々の風刺・反骨精神が強くなるかえります。

写真は、京都守護職として上洛し、配下の新選組などを使って京の治安維持にあたった松平容保（かたもり）を痛烈に批判した落書で、その姿は怪物に描かれています。「其形馬ノ如ク鹿ノ如ク（すなわち馬鹿）、異国之獅子ニ似タリ、依テ異人と大ニ中ヨシ（幕府の開国を批判）」とか「餅三ツト箸シ片シ付ヤレハ、コハカリ逃ルコト妙ナリ（一に三ツ星家紋の毛利家＝長州を恐れる意）」など、さんざんな書かれようです。容保は公武合体派の一員として、反幕府的な活動をする尊王攘夷派の弾圧にあたり、「文久三年八月十八日の政変」（1863年）では長州藩の勢力を京から排除しました。

* この落書は全国でほかにもいくつか見つかっており、数多く筆写されたようです。

* 当館の毛利家文庫のうち「29 風説」には、幕末から明治初年にかけての風説書が数多く残っています。その中には誤報や流言、デマ等も含まれていますが、当時の人々が様々な情報を集め、比較検討しながら真実を知ろうとしたさまがうかがえます。

No.136 福沢諭吉（「世界国尽」）



* 塩田家文書和漢 488
「世界国尽 巻一」

【解説】

福沢諭吉は明治時代の啓蒙思想家・教育者で、代表作「学問のすゝめ」をはじめ、生涯にわたって多くの著述を残しました。

写真は 1869（明治 2）年に著されたベストセラーの一つ「世界国尽」第一巻です。「世界国尽」は世界地理の入門書で、世界を 5 つの地域に分け説明しています。江戸時代の旅案内である「都路」などを手本にして、暗唱しやすいように七五調で書かれました。また、習字の手本にもなるように大きな文字で書かれています。

アフリカの部分では「ぴらみいで（ピラミッド）」、「内留（ナイル）川」、「麻田糟軽（マダガスカル）」などの言葉が見え、地図のページでは大西洋のことを本来の Atlantic Ocean に由来する「あたら海」と紹介しています。しかし「糸ちをびや（エチオピア）」の位置が実際とずれているなど正確でない部分も見られます。

* 当館には福沢諭吉の著作物として、日本初の簿記に関する訳書である「帳合之法初編一・二」（佐藤家文書と漢 245）や新暦を解説した「改暦弁」（内田家文書（防府市）2791・武田家文書 523）などがあります（4-2-3「太陽暦の採用」参照）。

No.137 郵便制度の創設

The image shows a historical document titled "各地時間賃銭表" (Table of Time and Rates for Various Places). It is a grid showing travel times and postal rates between various locations. The locations listed include major cities like 東京 (Tokyo), 西京 (Kyoto), 大阪 (Osaka), and many smaller regional centers. The table is organized into columns for different directions and rows for specific destinations. The rates are listed in '貫' (mon) and '文' (bun).

* 明治期政府布達類 141「布告全書 1 明治 4 年 1 月～6 月」

【解説】

飛脚制度に代わる国営の郵便制度を作ることは明治政府の課題の一つでした。

前島密の「新式郵便」の建議により、政府は 1871(明治 4)年 1 月 24 日、郵便創業の太政官布告を出し、3 月 1 日から東京—西京(京都)—大阪の間を 39 時間で結ぶ郵便制度を創設しました。

この太政官布告では郵便開設の趣旨や、取り扱い方法などが細かく示され、写真の箇所では東京から大阪までの各駅ごとに、配達時間、料金が示されています。

当初は、距離に応じて料金が上がる仕組みで、郵便切手も「賃銭切手」と呼ばれるなど現在と異なる点もありました。

運送に関しては、一人が運ぶ荷物の重量を 3 貫目(約 11kg)までとし、2 時間に 5 里(約 20km)進むこととされました。また夜間には安全確保のため随行員が一人つけられました。

翌年 7 月 1 日には北海道の一部を除きほぼ全国で実施され、また 1873(明治 6)年 4 月 1 日には全国均一の料金体制に改められました。

No.138 伊藤博文



* 吉富家文書 145 「伊藤博文写真」

【解説】

伊藤博文（1841～1909）は、山口県熊毛郡束荷（つかり，現光市）の出身です。幼名は利介で，俊輔，博文と称しました。

萩藩士の来原（くりはら）良蔵に見出された伊藤は，吉田松陰の松下村塾に学んだ後，1863（文久3）年いわゆる「長州ファイブ」の一人としてイギリスに留学。帰国後の翌1864（元治元）年高杉晋作の下関挙兵に力士隊を率いて参加しました。

明治維新後の1871（明治4）年から岩倉使節団の副使として欧米各国を歴訪し，帰国後工部卿を務めました。1878（明治

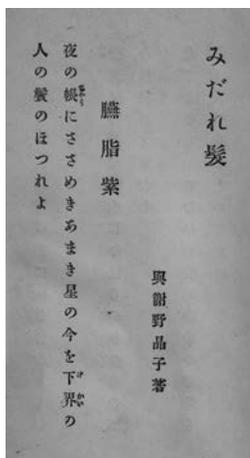
11）年に大久保利通が暗殺された後は，政府の中心人物として活動しました。

自由民権運動の高まりをうけて国会を開設することになると，伊藤は，ヨーロッパに赴いて主としてドイツ流の憲法理論を学び，帰国後は自らが中心となって憲法の草案を作成するなど，憲法の制定に力を尽くしました。1885（明治18）年に内閣制度ができると，初代内閣総理大臣となり，四度にわたってその職につきました。1900（明治33）年には立憲政友会総裁として組閣するなど，政党政治への道を開きました。

日露戦争後は初代韓国統監となりますが，1909（明治42）年ハルビン駅頭で狙撃され亡くなりました。写真は韓国統監時代のものです。

* 当館には，伊藤博文が内閣総理大臣の肩書で出した文書として，木梨家文書 89・90 などがあります。

No.139 新しい文章（与謝野晶子）



* 原田家文書(防府市)1165「みだれ髪」

【解説】

与謝野晶子（1878～1942）は近代日本のロマン主義を代表する歌人です。

彼女の第一歌集「みだれ髪」は1901（明治34）年8月に初版が発行されました。写真は1904（明治37）年9月発行の第3版です。

その子はたち櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

女性の恋愛感情を自由に詠んだ斬新なこの歌集は、たちまちベストセラーになりましたが、賞賛と同時に強い批判も受けました。

表紙ならびに挿絵は雑誌「明星」で仕事を共にした洋画家の藤島武二の手によるもので、次のように説明されています。

この書の体裁は悉く藤島武二先生の意匠に成れり。表紙画みだれ髪の輪郭は恋愛の矢のハートを射たるにて矢の根より吹き出でたる花は詩を意味せるなり。

初版では著者名は鉄幹との結婚前の「鳳晶子」でしたが、この第3版では「与謝野晶子」となっています。また第二歌集「小扇」の広告もついています。

晶子は作歌のほか、古典研究や女性の自立を求める評論など幅広く活動しました。日露戦争時に出された「君死にたまふことなかれ」は非戦を訴えた詩として有名です。

No.140 日本の美と欧米の美（狩野芳崖）



* 文書館図書 726-17-11
「防長先賢肖像絵はがき 狩野芳崖」

【解説】

狩野芳崖（1828～1888）は幕末から明治時代にかけて活躍した日本画家です。長府藩の御用絵師の家に生まれ、19歳の時、藩命により江戸に出て狩野雅信に学びました。のちに塾頭に選ばれ、橋本雅邦とともに門下の双壁と称されました。

明治維新以後、伝統美術が顧みられない時期がしばらく続きましたが、1882（明治15）年ごろから国粹主義の台頭とともに、伝

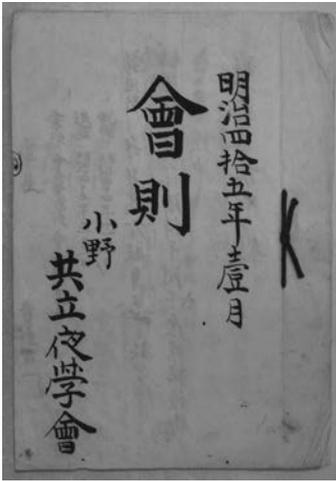
統美術の評価が再び高まりました。芳崖はフェノロサや岡倉天心らに認められ、日本画の革新運動に参加し橋本雅邦らとともに優れた作品を残しました。また東京美術学校（現東京芸術大学）の創設にも関わりましたが、その開校を見ずに1888（明治21）年に没しました。

写真上は1926（大正15）年発行の「防長先賢肖像絵葉書第1輯」に収められた狩野芳崖の肖像写真です。

* 写真右は1979（昭和54）年10月に開催された、山口県立美術館の開館記念特別展「生誕一五〇年狩野芳崖」の図録です。代表作「悲母親音」（写真上右上）をはじめ国内外に散在する彼の貴重な作品87点および橋本雅邦、横山大観など芳崖をめぐる作家の作品が展示されました。



No.141 学校教育の普及（夜学会）



* 小野家文書 409-1 「小野共立夜学会会則」



* 小野家文書 409-6 「自学之友 No.1」

【解説】

「小野共立夜学会」は明治時代末に萩市田万川で開催された夜学会です。これは満 16 歳以下の高等小学校の生徒ないし卒業生が先生役となり、向学心のある地元の尋常小学校の児童を教えながら自らも研鑽するという独特なものでした。教室は小野家に置かれていたため、「小野室」と呼ばれました。

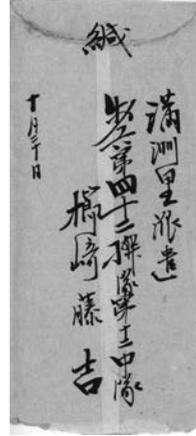
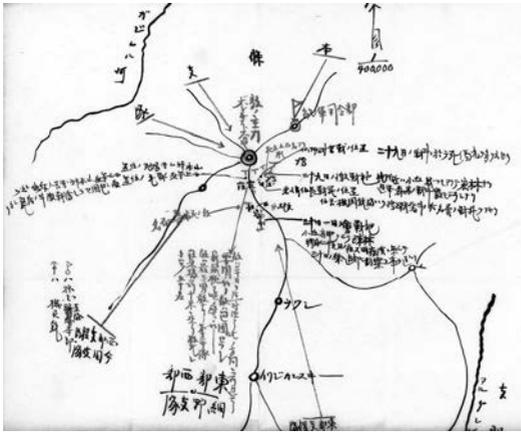
学習発表会や臨時考査も実施され、また担当児童の指導に当たっては成績について小学校と連絡を取ることなどもしました。夜学会は自主運営され、「会則」の中には「うそをいふな」「友を呼ぶ時はさんを付けよ」など集団生活の心得も記されています（写真左）。

写真右は 1912（明治 45）年 2 月発行の小野共立夜学会の会誌「自学之友」で、雑誌創刊が流行していた当時、中央の雑誌に影響されながら自分たちの手で作ったものです。手書きの誌面からは知識習得への意欲と熱意が伝わってきます。

夜学会は主に青年会の自発的学習活動として様々な形態で行われていましたが、次第に実業補習学校に改変されていきました。

* 県内の夜学会に関する文書は、柳原家文書や来栖家文書にも残されています。

No.142 シベリア出兵



* 津田家文書（宇部市）25「榑崎藤吉書簡」

【解説】

第一次世界大戦の末期にロシアで革命が起こり、激しい内乱状態に陥りました。こうした情勢の急変に対し、日本国内ではシベリアに出兵して、北満州からシベリアにかけて勢力拡大を図ろうとする意見が次第に強くなり、1918（大正7）年に仏・英・米等の連合国との共同軍事行動にふみきります（シベリア出兵）。ところが共同出兵した連合国内部の足並はそろわず、革命・反革命勢力の抗争も錯綜・激化したため、参加国は次々に離脱していきます。その結果、1920（大正9）年1月以降は日本の単独出兵という形となり、1922（大正11）年10月に撤退するまで、10億円もの戦費を費やし、3000人の戦死者と2万人以上の負傷者を出すという大きな犠牲を払った戦争が継続されました。

写真は、シベリアに出兵した陸軍歩兵第四十二連隊の榑崎藤吉が、1919（大正8）年9月26日～10月1日にバクダットスカヤ付近に集結した過激派軍（革命軍）に勝利した戦いの様子を日本に知らせた手紙です。一緒に綴じてあった図には、部隊の経路、戦闘の結果、主要地点間の距離などが示してあります。また、手紙には、「弾丸雨霰ノ如ク身辺ニ落下致シ候フ共、不思議ニ命長ラエ」たとの激しい戦闘の様子や、「目下当地ノ氣候ハ御地ノ嚴寒ニ等シク夜間ハ零下十二度ヲ示シ、昼間ハ北風ト共ニ雪花ヲ散シヨリ候」という厳しい気候などが記されています。

* 当館の田中義一文書にも、シベリア出兵に関する文書がまとめて含まれています。

No.143 大衆文化の発展（少女雑誌の創刊）



* 齊藤家文書 73
「雑誌挿絵切抜集」

【解説】

明治時代後期、女子の進学率があがってくると、高等女学校の生徒を読者に想定した『少女界』『少女世界』『少女の友』『少女画報』などの少女雑誌があいついで創刊されました。流行作家による文章、絵画、ファッションなどの新しい情報を届けたこれらの雑誌は少女たちに大きな影響を与えました。投書欄を通じた読者会も全国各地でさかんに行われました。

写真上は、明治時代の終わり頃の「少女の友」の口絵部分を切り取り、綴じたものです。竹久夢二、渡辺与平、川端龍子らの作品が収められ、手製の表紙が付けられています。

当時、雑誌の口絵は良質な紙に美しく印刷され、加えて竹久夢二などの流行画家が描いていたため、口絵のコレクションが少女たちの間で流行っていました。

* 写真右はキノツソ社「少女界」1923（大正12）年3月号です。吉屋信子や山田耕筰などが文章を書いています。この雑誌も口絵が切り取られています（堀江静子家文書 581）

* 渡辺与平については5-1-7「大衆文化の発展（ヨヘイ画集）」を参照。



No.144 公害問題（大気汚染測定車「おおぞら号」）



* グラフ山口 - 環境保健 195
「公害測定 おおぞら号」

【解説】

高度経済成長は、大気汚染、水質汚濁、騒音などの公害を発生させまし

た。水俣病、四日市ぜんそく、イタイイタイ病、新潟水俣病などの深刻な公害病も発生し、全国で裁判が相次ぎ、行政と企業の責任が厳しく問われました。

政府は1967（昭和42）年公害対策基本法を公布するなど法整備を進め、1971（昭和46）年には環境庁を設置しました。

山口県でも1968（昭和43）年「山口県公害防止条例」が制定され、1973（昭和48）年12月には、公害対策基本法に定められた7公害（大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音、振動、地盤沈下、悪臭）を対象に、監視、調査研究、試験検査、研修指導など公害に関する業務を行う山口県公害センターが完成しました。

写真は、大気汚染測定専用自動車「おおぞら号」です。県内の主要工業都市には大気汚染観測局が置かれていましたが、おおぞら号はそれ以外の地域を移動し観測を行いました。結果は直ちに山口県公害センター内に設けられた中央監視局に電波で送られ、当時としては最新のテレメータシステムにより大気汚染の状況が常に監視されました。